湘南ペガサスのあゆみ

（結成より１５年）

NO. 1（1993年発行）

目　　次

1．　チーム代表の言葉
（1）　結成の思い出と今後に寄せて　　初代代表　柳川明信　1
（2）　四十雀リーグ参加までのペガサス　　現代表　大内健嗣　1
（3）　四十雀のサッカー（サッカーの魅力）
ジュニアチーム代表　鈴木　中　2

2．　発足の頃の思い出
（1）　湘南ペガサス誕生　松本好且　5
（2）　湘南ペガサス発足時の思い出　牧村英樹　6

3．　歴代監督の回想
（1）　湘南ペガサス15年目を迎えて　山本　修　7
（2）　ペガサス昭和61年度の活動　中原弘巳　8
（3）　戦績回顧　牛尾慶邦　9
（4）　湘南ペガサスのサッカー　宮杉　武　10
（5）　1991年戦績回顧　関根和衛　10
（6）　湘南ペガサスの一員となって　伊通元康　11
（7）　シニアチームの監督を引き受けて　笹原経夫　11

4．　ペガサスへ参加して
（1）　VOICE OF PEGASUS　栗原克夫　13
（2）　サッカーとのつきあい　篠田　亮　14
（3）　リーグ優勝を目指して　田部井徹　14

5．　これ迄の戦績　17

6．　会員名簿　21

１．チーム代表の言葉

（１）結成の思い出と今後に寄せて

初代代表　柳川　明信

昭和５３年（’７８年）の夏の終わりか秋の初め頃だったと思いますが、東横線綱島駅のそばの小料理屋で、松本、岡田、大内、牧村の諸君と私とで久しぶりの昔話に花を咲かせていた時でした。誰ともなく『又みんなで昔のようにボールを蹴りたいねぇ』と云いだすと、『いいねぇ　やろうやろう　声をかければみんな集まるよ』と酒の勢いもあって衆議一決、メンバーは、チームは、ガンブチさんに相談は、わいわい　がやがやとやったのが事の起こりでした。

一気に事が決まるのも長い間培ってきた気心の知れた仲間と、伏線になっている湘南でのあのほこりと汗の匂いの思い出とが交差しているからです。

昭和２７年（’５２年）私が湘南を卒業した当時、サッカー専門の先生はおらず主に岩淵さんがお一人で指導に当たりＯＢが時々支援と云う時代でした。『お前は残れ』の一言で私の大学での遊びは無縁となり、宮原先生が着任するまでの間岩淵さんの助手、来る日も来る日もグランドで大声。その間どなられ且つ肝胆相照らしたのが前記の連中です。互いに社会にでてからも良く行き来しており、昭和５３年は私がちょうど東京へもどってきた時でした。

チーム結成に当たって湘南の名前をつけたいため、岩淵さんにご了解を得たいと思い松本、大内両君が訪問したところ、岩淵さんはこのチームの結成をとても喜ばれて予定メンバーの一人ひとりをチェックされたそうです。岩淵さんは旧制中学の有力選手中心のＯＢチームの編成を考えていたが、なかなか進んでいなかったためか無名の集まりでもＯＢチームが出来る事と、そのメンバーは自分が認めたＯＢである事、即ち湘南のＯＢチームと考えられていました。そしてペガサスの名前と共にこのチームに使えとユニホームをゆずって頂きました。

チーム結成の呼びかけに昭和２７年卒から３８年卒位？までの多くの人が集まり、岩淵さん宮原さんを交え洗心亭で楽しい旗あげをしました。呼びかけに皆が集まったのもやはり（湘南での汗とほこり）と、なんともいえない懐かしい感情だったのでしょう。それ以来活発な交流試合を行い、皆大いに楽しみ、メンバーも増え今日の発展を見ているわけです。　今日シニアチームと鈴木先生を求心力とした若手チームとに広がり、また湘南以外の同好の人々も参加しているクラブチームに成長してきました。ここまでこれたのも終始一貫チームの世話をしてきた大内、井上君の努力と献身、実戦面での山木、田川、中原君初め歴代のキャプテン、若手チーム結成の原動力小杉君等に負うところ大です。

皆の合意で楽しみながら運営してゆく以上会員全員の自制心と思いやり、チームへの参加意識が大切です。ここまで発展してきたチームをさらに伸ばして行く為に皆で努力して行こうではありませんか。

（２）四十雀リーグ参加までのペガサス

現代表　大内　健嗣

昭和５３年１１月２日の横浜市菊名の一杯飲屋でのこと、メンバーの決定、ユニホーム、チーム名、発足式等、チーム結成までのことは多分　柳川氏、松本氏、牧村氏、のところに記載されていると思うので省略することにする。

さて、チームは出来た。試合はやりたい。しかし常時使えるグランドを持たないペガサスにとっては「試合場の確保できるチーム」を捜して試合を申し込むしかなかった。

荏原インフィルコ、日本郵船、茅ヶ崎四十雀、古河電工、ＹＣＡＣ、小田原高校ＯＢ、神戸製鋼（藤沢工場）、デュクール（鎌倉市の小学校教員の３０才以下のチーム）、藤沢四十雀……などである。

チーム結成時、私は４１歳、従って一番年寄りでも４５歳、皆若かった。しかも、背番号は１から１１の中から自分の希望する番号をつけていたので、１、６、９、１０番だけで１１人となり、試合をしたこともあった。現在は、各自異なる番号だがこの時は高校時代のポジションがすぐわかるのでメンバーの決定が早い、しかし、ハーフがすべて６番とかフォワードは９番と１０番だけということもあり、相手チームのベンチから「１０番マーク」というと、「２人いるのでどっちだ」などという笑い話もあってこの背番号制度で勝てた試合もあったかなと思っている。

チーム結成から５年間はすべて親善試合なので１日２試合ということが随分あったと思う。これはやっとグランドが取れたから、サッカーが好きだから、集合人員が多すぎるので出場回数を増やすためとかである。

なにしろチーム結成時の人数は４５人位で常時２０人近く参加者がいた。

昭和５５年５月１８日は２７人集まった。従って、１試合は２０分×３または、２０分×４などで１日２試合にしないと消化不良をおこすのではないかと思えた。

四十雀リーグが出来る前に去っていった人もいれば是非一緒にやりたいと言ってペガサスに参加してくれた人もいる。

最初のうちは全員が車で来て試合が終わるとコーヒーを飲んで帰宅した。

しかしである……いつごろからか車でくる人がだんだん減りコーヒーが酒になり、カラオケが加わって帰宅が深夜になるのが多くなり現在もそれをきちんと守っている次第である。

あるスナックで５人か６人で６８曲歌ったことがあるが、先日聞いたらこの記録はまだ破られていないそうである。

月２回のアフターゲームを楽しみにして試合を見に行く俺を女房や子供たちは「馬鹿の見本」と言っている。何と言われようといい。Ｓｉｇｏｔｏの合間に　Ｓｏｃｃｅｒ　Ｓａｋｅ　Ｓｏｎｇ　の３Ｓで今後もペガサスにＳａｎｋａ　Ｓｕｒｕ

（３）　四十雀のサッカー　（サッカーの魅力）

ジュニアチーム代表　鈴木　　中

何ヵ月振りかで四十雀の若手のメンバーの中に入ってボールを蹴った。（平成３年リーグ最終戦　対茅ヶ崎）

最近少しづつ体慣らしをして、動いている為か公式戦３０分を何とかお荷物にならずに仲間入りする事が出来た。

サッカーと云うスポーツは大変教育的な男のスポーツだと思う。チームワーク即ち自分だけの事にとらわれずチームのために自分を犠牲にすることもある。子供達にとっても大変有意義なことが多い。体を鍛える、頭を使う、自立心を養う、協調性を身につける…等々いいことづくめである。

私の様に永年サッカーを教えている目から見ると、好きなｐｌａｙは派手に点を取ることより、地味だけれどうなるような良いパスが出された時、身を呈して相手のｂａｌｌをうばい取って味方に渡した時、そんな時すばらしさや、美しさを感じます。もちろんアクロバット的な華麗なｐｌａｙもすばらしいと思います。

しかし私の好きなｐｌａｙはあまり人にはわからないが、その選手が自分丈の得意技を使って良いｐｌａｙをしてニヤニヤしている時何となく男の美学を感じます。

ウイングｐｌａｙｅｒが絶妙のセンターリングを入れてＣＦが得点し、観衆から喝采を浴びている時一人ニヤニヤしながら、“良いパスがあれば得点なんて誰でも出来るのだ”と心の中で思っている時が一番気持ちの良い時なのです。

年を取って四十雀のサッカーはどうすれば良いのだろう。勝った負けたは二の次の様な気がする。試合が終わって、ここち良い疲労と満足感を味わうにはどんなサッカーをすれば良いのだろうか。

味のある魅力あふれる年寄りのサッカーとはどんなものだろうか。人様々で良いと思うが、「あるレベル以上の体力と気力の上に立って，良いｐｌａｙ、良いｐａｓｓのサッカ

ー」が目指すものの様な気がする。納得の出来るサッカーをやる為にはそれなりの準備が必要だろう。次の試合のスケジュールに合わせて準備とトレーニングそして満足できるｐｌａｙをしてうまいビールを飲む。体のアチコチの痛いここち良い疲労は次の日からの仕事には決してマイナスにはならないだろう。

あるレベル以上の体力を維持する為には涙ぐましい努力を必要とするかも知れない。そんな努力をしようとする強い意志があれば四十雀のサッカー選手の資格は十分あると云って良いだろう。

２．発足の頃の思い出

（１）湘南ペガサス誕生

３０年卒　松本　好且

この事については、「湘南サッカー半世紀を経て」で柳川さんと大内君が詳しく書かれており、重複することになるのですが……。

あの日は確か昭和５３年１１月２日（木）でした。横浜菊名の飲屋で（何故菊名だったのか分からない。）　柳川さんの“東京栄転祝い”を岡田、大内、牧村、松本でやっていました。その時「まだゴルフは早い、若い内は、又チームを作ってサッカーをやろうじゃないか……」と云う話になり、地元在住の大内君と私が岩淵さんの所へ行き、ご意向を伺うことになりました。

我々昭和３０年卒の現役時代は確かに低迷期でありましたが、宮原先生が赴任される前で、柳川先輩のコーチのもと、まとまりのあるチームでありました。又、岩淵さんの、どうにかして勝たせたい、という案で、当時はまだ他のチームは５－３－２のフォーメイションの時に４－２－３－１と、スイーパーを置く、ボルトシステム（岩淵さんの命名）を採用していました。そして、３１年、３２年卒を入れて卒業後一時期「フェニックス」の名でクラブチームとして１０年程活動していた時期があります。

さて、その菊名の会合の１０日後、１１月１２日（日）に岩淵さん宅へ伺ったときのことは、大内さんの名文がありますので引用させていただきます。ただその時先生は開口一番“柳川はどうした！”とおっしゃっていましたが。

－－－調べた蹴球部在籍者名簿を持って１１月１２日に岩淵さん宅へお伺いし、主旨を話すと、待っていたとばかりに大賛成され、メンバーについても『偉い先輩達は社会的に重要な地位にいたり、勤務先の関係でなかなか集まりにくい様だ。君達位の年代が一番まとまり易いだろう、是非やってくれ。』とおっしゃって我々が持参した在籍者名簿を見ながら、一人ずつ現役時代のエピソードなどをまぜながら人選されました。（選ばれながらも不幸にして個人的、地域的な理由から参加を見合わせた方も何人かおります。）人選を終え、名前を見ながら一人うなづいておられました。この人選作業を見ていて、岩淵さんのサッカーに対する情熱の一端を見せられたような気がしました。人選が終わると「今度は相手と場所だ　な」とおっしゃって、その場で「神奈川四十雀」と鈴木中先生宅へ電話をされて、わずか３０分位でチーム名を除いて、クラブ員、初試合の相手、場所、日時を決めて下さいました。更に『俺も入れろよ！俺はセンターフォワードだ。それからユニフォームがないといかんな。』とおっしゃって、奥の部屋から例の（諸先輩もよくご存知のあのユニフォームです）ユニフォームを持ってこられて『このユニフォームを寄付する。俺もクラブの一員だから。』と。我々がユニフォームは新調しますと云っても聞き入れず、『さっきも云ったように、旧制の先輩達は時間的な余裕がなくてなかなか集まれないので、こうやって２カ月に１回は試合をやるチームが出来た事だからこれを使え』とおっしゃり、（我々は極力辞退したのですが）１３着を８万円で譲り受ける事になりました。（後々このユニフォームは湘南ペガサスよりＯＢ会に寄贈し、現在はペガサスで管理保管しています。）そうして１２月１７日、湘南高校グランドにて初試合をおこないました。４対２で初戦（対神奈川四十雀）に勝ち、発会式を兼ねて「洗心亭」へ集合しました。

この会合で、チーム名を「湘南ペガサス」と命名され、集まった教え子達を前にして、こんなに沢山まだサッカーをやろうとする奴がいるという事に、何度も嬉しそうにうなづいて『次の試合は何時何処でやる』といわれ、たいへんご満悦の様子でした。その後、岩淵さんはペガサスとして第３試合（昭和５４年５月１２日、対荏原インフィルコ）においでになり前半をセンターフォワードで出場されました。５対２で我々が勝つのを見た上で、帰り際に『俺はもう試合をやらないが、試合通知はくれよ。このユニフォームでガンバレ！』と云われた事がとても印象に残っています。ペガサスの生みの親として、又、こわいコーチとして常に我々のそばにおられた岩淵さんも今はもう他界されてしまいました。しかし、ペガサスの試合のたびに岩淵さんを思い出

さずにはいられません。－－－

まさにこの通りであり、我々２人は岩淵さんのサッカーに対する情熱に圧倒される思いでした。

あの日に出た話しを事務的に列記しますと、

１．連絡方法　－今回発足時と、以後の試合の連絡、電話か手紙か連絡網の整備、学年別か地域別か

２．人数不足の場合の現役、Ｃ級の補充（特にＧ．Ｋ．）

３．メンバーの事　－昭和２７年卒から３７年卒迄とする。その前後は切る。

４．対外試合の事　－グランドと審判の確保がむつかしい。
第１回の試合は年内１２月１７日（日）にしたい。
場所は湘南高校グランド
会費はユニフォーム代として１万円とする。

５．相手チームとして　－神奈川四十雀、藤沢四十雀、鎌倉教員、
実践女子大、横浜女子高、藤沢市のリーグ戦への参加

６．ユニフォームの件　－先生が２０着持っておられる。これをわけていただく。
不足分は補充して常時１１着は会で保管する。３回以上試合に来た人は初めて持たせる。

７．チーム名　－湘南ファントム（フェニックス、ペガサスの流れを汲む）
湘南サッカー２７－３７

３．のメンバー選びでは『こいつは入れなくてよい！』と云われた人も居た事をここに書きおきます。

４．と５．の１２月１７日の件と相手チームについては、鈴木中先生に電話をされ湘南高校グランドで神奈川と藤沢四十雀ですぐにきまってしまいました。

６．のユニフォームは、岩淵さんは御自分の９番を別にして、１９着あるから『お前達に提供する』とおっしゃっていただきました。確か９番は２着あったのだと思います。

７．のチーム名は“ファントム”だったと私は記憶しています。『ペガサス』と言う名は、当時井上君達のチームが使っていたのだと聞いています。

しかし、翌昭和５４年１月１４日蹴球祭の後の「洗心亭」で「湘南ペガサス」と命名されました。

あれから丸１４年、こんなに盛大になったペガサスを岩淵さんに見せてあげたかったと試合のたびに思っています。

（２）　湘南ペガサス発足時の思い出

３７年卒　　牧村　英樹

私が大阪で勤務をしていた昭和５０年頃、ふとした縁から松本・大内両先輩とご一緒する機会（一杯飲む）がありました。懐かしい湘南時代のサッカーの話をしたものでした。昭和５３年に私も東京に転勤で戻ってきた時歓迎会を名目に現役時代は鬼より恐いと云われた柳川先輩もご一緒に横浜線の菊名駅の近くにある居酒屋で集合しました。飲む程に酔う程にサッカー気違いの私たちは盛り上がり、ついには年を忘れて現役時代の気分に逆戻り…サッカーチームをつくって時折ボールを蹴ろうじゃないかと衆議一決しました。柳川さんが最年長であり私が最年少であったわけですがその１０年間で選手を募ることとなりました。馬に羽の生えたペガサスが好きだったことからチーム名として提案したところ「湘南ペガサス」でいこうということで決まりました。後に大内先輩が岩淵先生に報告をし承認をいただいた結果、江ノ島の洗心亭で盛大に発会式が取り行われ、「湘南ペガサス」がここに歴史的な１頁を開いたのでした。

３．歴代監督の回想

（１）湘南ペガサス１５年目を迎えて

２７年卒　山本　修

“第２回四十雀リーグ準優勝”

湘南ペガサスサッカークラブのチーム結成後初めての練習試合が昭和５３年１２月に開催され、それから５年間　昭和５８年までの記録を振り返ってみると年に５～１０回程度集まって藤沢四十雀、茅ヶ崎四十雀などを対戦相手の親善交流試合という活動内容であった。

昭和５９年（’８４）に神奈川県サッカー協会郡市サッカー連盟が組織されて第１回郡市四十雀サッカーリーグが開催された機会にペガサスもこれに加入し、以来年間試合回数も１５～２０回に増加し、この四十雀リーグの試合がクラブの年間活動の中心となっている。

第１回四十雀リーグは参加１６チーム、４チームづつの予選リーグの後８チームの決勝トーナメントで実施され、ペガサスは予選２位、決勝トーナメント１回戦敗退という成績であった。

この年までは年間主要活動が親善交流試合であったことから、試合の出場メンバー編成、ポジション選定もかなり適当にやられていて、当時の試合案内連絡の世話をしてくれていた大内健嗣氏が前後半の出場メンバーのアレンジをしてくれていたようであるが、上記昭和５９年の第１回リーグ終了後の忘年会あたりで、来年のリーグ戦には当クラブとしても監督を選任して試合のメンバー編成は一任しようという話が持ち出され、昭和６０年度は私が監督ということになったと思うが記憶は定かでない。

昭和６０年（’８５）の第２回四十雀リーグは参加１５チーム、５チームの予選リーグで２位となり決勝トーナメント１回戦は綾瀬四十雀に１－１ＰＫ戦勝ち、準決勝の対茅ヶ崎四十雀では前半０－１とリードされたのを逆転で３－２で勝ち、決勝は神奈川四十雀と対戦して０－３と破れたが準優勝の好成績であった。準決勝で勝った時の祝勝会は大磯の蒼浪閣で盛大に行われスポンサーの故小瀬村秀夫氏には大変お世話になりました。

翌６１年（’８６）の第３回リーグからは参加チームも１８チームに増加して２部リーグの体制が整備され、一方ペガサスも毎年４０才になった若手メンバーが加入して私のような５０才以上のメンバーの出場チャンスも少なくなってきたことから、この年監督を中原弘巳氏に引き継ぐと共に、私の選手登録も５０才以上メンバーでリーグ新加入の神奈川四十雀Ａチームへ移籍した。

“五十雀リーグへの期待”

湘南ペガサスクラブ設立後１０年経過すると発足当時のメンバーのほとんどが５０才以上となり、毎年４０才の新人が加入して四十雀リーグ１部公式戦に出場するのは４０才代の若手メンバーが中心となり、５０才以上のシニアメンバーは年数回の親善交流試合に参加するだけという状況になってきた。

平成元年（’８９）からは、横浜サッカー協会シニア連盟主催のマスターズＯＢ大会に参加し、湘南ペガサスの５０才以上だけでは人数不足のところを藤沢四十雀の応援を得て年１回の試合ではあるが、５０才以上のメンバーで対戦する試合機会が確保されるようになった。

一昨年の暮れには設立後満１２年経過してクラブ内の世代交替も十分に進んだことから、発足当時の年代層でペガサスシニアチームを編成する話がまとまり、栄光学園の５０才以上ＯＢの協力も得て数え年５０才以上メンバーの選手登録により昨平成３年度２部リーグに加盟した。この機会に私も四十雀リーグ選手登録を神奈川Ａチームから移して湘南シニアに復帰した。

平成３年（’９１）の成績は２勝１分７敗１１チーム中９位であったが、対戦相手の内５０才以上の神奈川Ａの他は４０才代中心のチームばかりで平均年齢が１０年若いチームを相手の戦いは大変厳しい試合の連続でまずまずの善戦であったといえる。

四十雀リーグも今年（’９２）第９回を迎え、新たに２チーム増えて１部２部各１２チ

ームのリーグ戦が開始された。第9回にもなるということで、リーグ加盟の各チームも設立当時のメンバーの多くが５０歳以上となって世代交替が進んでいるのは共通の問題であることが想定されることから、２年程前から個人的にリーグの連絡者会議などの機会がある度に、５０代選手の多いチームにはシニアメンバーの第２チーム編成を呼びかけ、何とか五十雀リーグ発足への準備を提案してきた。

神奈川県協会としてもようやく今年度５０歳以上のオープン試合開催を企画する段階となり、４月の代表者会議では神奈川、湘南に加えて茅ヶ崎Ａ、Ｂ、横浜ＯＢの５チームが参加を表明し、藤沢、横須賀も単独では人数不足だが合同で１チーム編成してはどうかという機運になり、来年度五十雀リーグスタートへの期待が高まっている。

高齢者でも、体力、走力が同じレベルの同年代のチームがお互いに対戦することがサッカーを長く楽しむための最良の方法と考えられる。

神奈川四十雀や東京四十雀クラブには、以前から４０才代、５０才代、６０才代の年齢別チームが編成されており、毎年の関東四十雀大会には、各県からそれぞれ年代別チームが集まって交流試合を楽しんでいる。

ペガサスシニアチームの発足により湘南ＯＢだけでも６０才以上の旧制中学チーム、５０才以上のペガサスシニア、４０才以上のペガサスと年代別のチーム編成が出来るようになったのは嬉しい事であり、私も８０才までグランドに立つことを目標にこれからも励みたいと考えている。

（２）　ペガサス昭和６１年度の活動

３０年卒　中原　弘巳

昭和６１年（’８６）には四十雀大会は３年目を迎え、１部（８チーム）と２部（１０チーム）に分けての本格的な総当たりリーグ戦となった。ペガサスは前年の準優勝の勢いをもって、１部での優勝を目指す年であった。とは言え各チームとも手ごわく実力は接近していた。第１戦の鎌倉を思いがけず１－１で引き分けてしまった。この試合結果がその後のリーグの戦績に大きく響いたと思う。勝つべき試合を確実にものにして、勢いに乗る重要さを知らされたことであった。

この試合は優勢に進めながら、朝鮮高校の狭いグランドということもあり小林の１点のみしか取れず、後半フリーキックによるロングシュートを決められ引き分けた。この試合はグランドの予定が不明確で、試合をいったん中止としながら再度実施としたため、一部の方が試合に参加できず迷惑をかけた。少ないメンバーでも十分勝てると思った甘さがあったと思う。

その後、横須賀に０－４、綾瀬に２－８と両チームに大敗を喫した。スピードのあるチーム、大きなパスで左右にふりまわすチームに弱い欠点が出た試合だった。横浜シニアには１－２での敗戦であったが、これは１０人での試合であり善戦であったといえる。

藤沢には４－０での快勝、神奈川とは１－２での惜敗だった。このようなゆっくりとしたテンポのチームには、神奈川のような巧いチームであっても相性がよい。

最終戦は対茅ヶ崎で、必勝の意気込みであったが、拍子抜けの不戦勝となった。この結果、リーグ成績は得失点差で辛くも６位となり１部残留とした。

その他、ＪＡＬ、筑波大付属、小田高、栄光、ＩＢＭ、ＹＣＡＣとの各定期戦及び高校ＯＢ大会等多くの試合を行った。勝敗への緊張感のある四十雀リーグとは別の意味で、芝生のグランドとか桜の花の下で、良い仲間とサッカーを楽しむことができた。

昭和６１年４月～６２年３月まで、合計２０試合を行い、９勝８敗３分けであった。

一時的な中だるみがあり、参加メンバーが少ない試合があったが、何とか四十雀リーグの１部に残り、全体としては多くの試合に１６～１８名のメンバーが参加し、まずまずの年であったとしたい。

（３）　戦績回顧

３２年卒　牛尾　慶邦

選手としては勿論監督としても、人間性、技術とも絶対の信望を持っておられた先輩監督お二人のあとを引き継ぐのは大変な勇気がいるものだったし、自信なんてなかったが、決まった以上は開き直って胸を張って進まなければならなかった。

結果としては、大きく立派な成果が実った１つの時代となって光っているが、これは全く好運によるものである。もともと湘南ペガサスは全員揃えば強大であって、他チーム、特に強いチームほど闘志を向けてきたものであるが、先代、先々代とも不運にも名選手が集い揃う事がほとんどなく、相当なご苦労をされたものと私は感じている。

頭の下がるご努力によりペガサス・サッカーの土台がしっかりと築き上げられたあと、私の時には一転して、多すぎる集合選手の全員出場を毎試合果たしながら勝ちをあげてゆくという苦労？をすることになった。　しまいには２チームできる程が集まったばかりでなく、例えばその人がいる時は味方のゴールキーパーは退屈でたまらないしその試合は絶対負けなかったというバックのかなめの福井（弟）、点を取るためには相手の怪我など知らん顔の豪傑宮杉や藤田、その他物凄い選手達に恵まれ、控えを告げると睨み付けられるような気配を感じつつ、めまぐるしい選手交替に迫われたものだった。

昭和６３年（’８８）年初に第１回が始まった神奈川県議長杯トーナメントに見事優勝し、続く第２回も実力優勝を果たした。郡市四十雀リーグ戦は優勝はのがしたものの　準ずる成績であり、光った時代と前述した所以である。

さて、私が貫いた方針は「あくまで全員攻撃　絶対に下がらない　守らない」だった。「点は取られてもいい、取った喜びを味わおう」だった。点を取られまいと努力するばかりで攻撃の楽しさを味わえないままで終了してしまう愚かさが大嫌いだったのである。

私よりも技量も戦術もすぐれた人たちにこの方針を理解してもらうために、当時常識的にとられていたフォワード３　ハーフ３　バック４の布陣をとらず　敢えて５－３－２、４－４－２としてそれぞれ特徴の異なる相手毎にポジションを考えたものである。

下がり癖のある選手や突っ込みが不足する選手にハーフまたはバックをやらせると　全体がずるずる後退し、中盤を支配されてつらく苦しいだけの試合になってしまう。こういう選手は強力なフォワードの中にこまぎれに投入して悪い癖がチーム全体に及ぶのを防ぐよう心がけたが、これはずいぶん効果があったしフォワード要員が増えた結果ともなった。

（はからずも平成４年度監督をやっていたいただけることになったばかりの笹原さんが最初に言明された「サッカーは得点するためにやるのである。我々の１動作１行動はすべてシュートに結びつくものでなければならないことを肝に厳銘せよ」というお言葉は私にとって正にジーンとこみあげてくるものがあった。）

失敗もあった。絶対勝てると思った相手の時に、それまでバックをやった事のない人たちにバックを、フォワードをやった事のない人たちにフォワードを適性発掘を理由にやらせた結果、大怪我人が出たり不満を生んだりというとんだハプニングとなった。（試合は後半正常に戻して突き放した。）

ともあれ　小心者が２年間大変なつらい思いをして努めた監督業務だっただけに、納会で後継人事が決まり開放されたとき　酒に酔い痴れながら味わった心からの安堵感と幸福感はいつでもありありと思い浮かべることができる。（それ以来酒がむしょうに好きになった。）

ここで全員に心から耳を傾けてもらいたいことがある。これほど大変な監督は勿論連絡人、会計人などの世話人は順に経験してもらいたいものだし、サッカーを楽しみたいからこそ「全員が四級審判員の講習を受け　最新のルールに精通する義務を認識し　更に審判の交替受け持ちを積極的に行う。」ことの実現に向かい各々努力されんことを。又　笹原さんの方針を理解し努力されんことを。

（４） 湘南ペガサスのサッカー

栄光学園ＯＢ　宮杉　　武

『湘南ペガサス』、ここで１０年以上も仲間に入れてもらい、サッカーをおおいに楽しませてもらいました。

小学生のサッカーチームのコーチ仲間であった松本さんと大内さんに勧められてペガサスの一員になってから、前の会社（千代田化工建設）の上司である山本さん、大学サッカー部（東京工大）の先輩である近藤さん、今の会社（松尾工業所）の先輩である故服部さん、高校（栄光学園）サッカー部の同輩の友人である薬品さんを含め、とても多くの人と既に繋がりを持っていることがわかり、サッカーの世界の繋がりの身近さを感じました。そして何よりも高校時代によきライバルとして闘った懐かしいメンバーと一緒にプレイができることは感動的でさえあります。

岩淵さんの『来るものは拒まず、去るものは追わず』の教え通りによそ者である私を監督（平成２年）に据えたペガサスの度量の大きさに敬服もしました。残念ながら私が監督だった１年間はそれほどの成績が挙げられませんでしたが。

ペガサスのサッカーの特徴として、メンバーそれぞれがサッカーを良く知っているため全員が楽しみながら試合を進めていること、全員のレベルが高いところで揃っているため個人プレーに走らず組織だったチームプレイに徹していること、そしてメンバーの上下の関係が尊敬と信頼で強く結びつけられていて極めてアットホームな感じをチーム内に漂わせていることが挙げられます。

特にアフターサッカーでの関さん、小林さんの試合場では見られない楽しさ溢れる振る舞いはいつも感激し、一時は試合中にゲームが早く終わってくれないかと思うようにさえなってしまいました。

これからもこの素晴らしいペガサスというチームを末永く維持してもらいたいし、機会ある度におおいにプレイに参加し、湘南ペガサスのサッカーを通じて体と心の洗濯をしていきたいと思っています。

（５） １９９１年戦績回顧

３２年卒　関根　和衛

大内さんから電話があった。「関根、欠席裁判だが監督に決まったよ、引き受けるか。」「決まったなら引き受けざるを得ない、ＯＫしかないですね。」ということで受諾した。

考えて見ると今から３０年前の昭和３６年（’６１）の大学生の時投票用紙？の石塊でサッカー部のキャプテンに選出された状況と酷似している。双方ともチーム力は弱く大変なチームの責任者になってしまったものだと後悔した。

若い３０年前のチームは弱くともｓｕｎｒｉｓｅ、それに引換我がシニアチームはｓｕｎｓｅｔ、ｓｕｎｒｉｓｅの時は、神奈川リーグ、関東リーグ（３部×７ブロック）とも２位の好成績でキャプテンの責任は辛うじて果たした思い出がある。　がｓｕｎｓｅｔチームの平均年齢は平成３年（’９１）４月１日現在、５３才弱で戦力的には大幅なダウン及びこのチーム結成の主旨から、チーム及び自分にも余り多くを望まず楽しいサッカーを実行することだけを念頭に入れた。

このチームの監督の主な任務は、試合当日の先発メンバーの編成及び選手交代で、これがなかなか難しく、参加人数及び個々人の体力等を十分加味して決定しなければならない。幸い参加率は登録メンバーの６０％（１４～１５人）余りで１０試合を棄権せずに乗り切ることが出来ました。リーグの戦績は２勝１分け７敗ですが私としてはこのチームの現在の力では十分な成績だと思います。メンバーの皆様のご協力に対して心からお礼申し上げます。反省するところは多々ありますが紙幅の都合上割愛します。

（６） 湘南ペガサスの一員となって

４１年卒　伊通　元康

ぼくがペガサスのメンバーになったきっかけは、田川先輩よりのお誘いの電話からでした。平成元年（’８９）の３月だったと思います。ぼくは高校卒業以来継続してサッカーをやっていなかったので、最初はとても不安だったことを思い出します。それでも無事３シーズンを過ごせたのは、諸先輩の方々が培われたチームの雰囲気の良さのおかげでこれは今後も大事にして行きたいものです。

平成３年度（’９１）はチームも二つに分かれ、またぼくは監督という重責を仰せつかり無我夢中の一年間でした。残念ながら、リーグ戦では、メンバー不足という試合が三試合もあり、ぼくの力不足を痛感した次第でした。リーグ戦の結果を知り、二部への陥落を免れたと分かったとき、正直なところ、ほっとしました。陥落したときは、頭を丸めようと思っていましたので。

それはさておき、平成３年度はペガサスの転機の年でした。シニアとジュニアの二チームになり、僕らのジュニアチームは、昭和４１年、４２年卒が、メンバーの大半を占めることになってそれなりに活躍？出来るのも喜ばしいことでした。リーグ戦の終了間際になって鈴木中先生も参加され、身の引き締まる思いをしました。ゲーム中まわりを身まわすと、２０数年前にタイムスリップしたような気がしたものです。外観・風貌は昔と変わっても、気持ちは昔のままで、これからも楽しいサッカーを続けて行きたいと考えています。

（７） シニアチームの監督を引き受けて

浦和高校ＯＢ　笹原　経夫

歳の順で一度はやらねばならぬものならばと湘南ペガサスシニアの監督を引き受ける事になった。ペガサスに参加できるようになってまだ日も浅く私の素性をよく御存じない方もいらっしゃるのではないかと思いまず私のサッカー歴の自己紹介をさせていただく。

中学３年の一学期迄私はサッカーと呼ばれる球技を知らなかった。田舎の中学校でタッチフットボールに熱中していた私が初めて蹴球と呼ばれる球技を見たのは昭和２３年（’４８）浦和へ転校した時であった。下、早川を擁する湘南がインターハイの予選で浦和に来た頃である。高校卒業後その湘南のお膝元である片瀬に住みついて湘南キッカーズに名を連ねるようになった。その頃の名簿が今ここにあるが私を含む数名が現ペガサスにいる。この名簿を見るだけで当時の情景が次々と目に浮かんでくる。はやばやと故人になってしまった者もいて年月の重みを否応なく感じさせられる、合掌。湘南キッカーズの活動は転勤者が増えるにつれて１１人の動員が困難となり自然消滅のやむなきに至った。その結果私の執った選択は「一人あるいは少人数でできるもの」としてのテニスでありヨットであった。サッカーは「やるスポーツ」から「見るスポーツ」になったのである。以後３０年近い年月が過ぎた平成元年（’８９）１２月に元湘南キッカーズのチームメイト田川明の勧誘で湘南ペガサスに参加することになりここに「やるスポーツ」としてのサッカーが復活した。

次に監督らしいポーズをとる為に何らかの方針を掲げるとすれば「全てのプレーの最終目的はシュートにある」シュートにもっていく為の「パスの成功率はどれ位か？」。プレーの組立、あるいはこぼれ球を拾う時などの待ち伏せ行動を効率よくする為に常に「次の展開を予測しながらプレーする」を挙げたい。当たり前の話で恐縮だがゴールキーパーがボールを出すのも、中盤での華麗なパス回しも全てはシュートをする為にある、言い換えればシュートができなければそれまでの努力は全て無に帰す。個人の属性である運動能力あるいは技能によりシュートがきわどいコースで外れたり（大きく外れるのは不可）または相手キーパーに防がれることは問わない。しかしシュートに結びつかなかったプレーは反省せねばならない。何回パスを試みて何度その目的を達したか？ルーズボール争奪戦の予期せぬこぼれ球をあわてて拾いに走るよりもこのエリアに出てくればいただきと待構え

ているほうが同じこぼれ球でも支配できる確立が数段高くなると考えるからである。

最後に私の偏見をひとつ：「打つ」という単語を極端に嫌う、シュートは「打た」ないで「狙う」かまたは「する」こと、「シューッ！！！」と叫ぶだけでも「シュートせよ」、「相手ゴールを狙え」の意あり〔英英辞典参照〕。これに対し「打つ」はボールを「打つ」行為そのもののみを言いその結果ボールがライトへ高く舞いあがろうがレフトへ転がろうが行く先までは規定していない。すくなくとも我がシニアではシュートを促す時に「打て」などとうつろな音声を発しないでもらいたいものだ。

【言葉の誤った用法を矯正する義務を負うＮＨＫが頻繁に「シュートを打つ」と誤用するので訂正依頼の文書を送ったが「現場の慣習である」と無視されている。】

４．ペガサスに参加して

（１）ＶＯＩＣＥ　ＯＦ　ＰＥＧＡＳＵＳ

２７年卒　栗原　克夫

何時頃だったか詳らかではありませんが昭和５３年初頭だったと思います。当時勤務の関係で大阪にいた小生に同期の柳川君から湘南ペガサス誕生についての連絡をいただきました。設立についての故事来歴、ガンブチさんの近況、メンバーになる資格、等を聞きました。小生も仲間に入れていただけるということなので、いつか機会が到来したら是非参加したいと思っておりました。その後何ヵ月か過ぎてから岩淵さんの訃報に接し（知らせてくれたのも柳川君でした）往時の面影が走馬燈のように浮かび、しばし瞑目し回想して、心からご冥福をお祈り致しました。

東京に転勤になったので昭和５６年の蹴球祭に久しぶりに参加したのを機会にペガサスのメンバーに加えていただきました。帰りの藤沢駅前の「たぬき」でお酒をたしなみながら皆さんのつもる話を聞かせていただきました。

小生も少しづつ身体を慣らしていかないと足がつってしまうのではないかと思い５号球を買い求め近所の公園で足ならしをはじめました。幹事さんから案内をいただくたびに約４年半ほとんど休む事なく試合には参加させていただいたと思います。何よりも楽しみは試合終了後、反省？しながら有志で飲む酒は格別で回を重ねるうちに身体が要求するようになり習慣になってしまったようです。

まさか地方への転勤はもうないのではと思っていたところ昭和６０年（’８５）の初夏から４年間も遠い四国の松山へ転勤ということになってしまいました。妻子を東京に残し、一人住まいの単身赴任もまた楽しからずや、と負け惜しみを言ってはいたものの淋しい思いを慰めてくれたのは田川君や幹事さんが郵送してくれたペガサス通信でした。アシストが誰々で得点が誰だったとか、勝った負けたの試合結果、人が集まらなかったとか、次回の対戦相手や日時、場所等の連絡を読みながら試合の模様を想像しておりました。次のペガサス通信は試合が○月○日だから大体何日ぐらいには来るなと思いながら首を長くしていたものでした。東京に戻ったらすぐに試合に出られるようにしておこうと思い立ち、工場の芝生の庭に入り込んでドリブルしたり、穀物サイロの壁に向かってボールを蹴ったり、朝早く起きてジョギングしたりして健康で清潔な毎日を送っておりました。時たま山本君が仕事で近くに来たとき松山に立ち寄ってくれたので彼からもペガサスの様子を多少聞くことができました。東京での会議の日程がたまたまペガサスの試合日と合った時は顔を出させていただきました。年に２回ぐらいはあったと思います。長いようで短かったようにも感じられ、苦しみも悲しみものりこえて、ジューシーであまずっぱい伊予柑のような味がする楽しい思い出だけを心に秘めて伊予の国を離れ、花のお江戸に戻って来たのは昨年（平成２年）の５月でした。ペガサスのメンバーも湘南ＯＢだけでなく多方面から多数ご参加いただいて充実し大世帯となり戦績もマズマズで今年（平成３年）は２チーム編成が出来たほどに大きく成長しております。おめでとうございます。ガンブチさんも天国でお喜びのことでしょう。これはひとえに創立以来ペガサスを背負ってこられた歴代の代表、幹事、世話役、会計、監督等の大役を心良く引き受けて下さった方々のご努力の賜と心から厚く御礼申し上げます。今後もよろしくお願い申し上げます。これからもメンバーは益々増えていくことでしょう。明るく朗らかな楽しい健康的なサッカーを致しましょう。ペガサスには定年はありません。出入り自由です。特権なんてありません。皆平等です。４０才になれば誰でも入会出来ます。すべて自己申請です。一人ひとりが自己管理をしっかりすればよいのです。何が違うかと云えば体力でしょうね。年をとれば必然的に体力は衰えますし健康を害する事も起こるでしょう。けれども管理できれば一人ひとりの力を十分に発揮できますよ。生きがいにつながると思います。今いるメンバーの生きる姿をみて人生を輝かせてみませんか。いつまでも現役意識をもって自分で能力と意欲を引き出し燃えつきるまで頑張りましょう。我々は年齢に関係なく天駆けるペガサスのようにいつまでも美しく輝くことでしょう。

（２） サッカーとのつきあい

３３年卒　篠田　亮

まず会員の皆様に、日頃のご交誼を深謝致します。高二の時（昭和３１年）対組スポーツで親しんでから、サッカーとの関わりは３６年になります。この間断続的にボールに触れていました。藤沢に住むようになり、昭和５８年（’８３）にペガサスに入れてもらってからは、生活の一部にさえなっています。サッカーで駆けずりまわって、旨いビールが飲めるのも皆様のおかげです。

入会したころ、どうしてこれ程“狂”又は“好き者”が多いのか不思議に思ったものです。昔日、現役時代に燃えたりない焼木杭に火がついたのかとも考えましたが錚々たる球歴の先輩が喜々としてボールに戯れる姿を見て、サッカーそのものが魅力の源であると考えざるを得ません。

ルールはごく単純なのにその戦況は万華鏡の如く変化し、その移り変わりの中に一瞬の得点機会が生まれる。そのとき白刃一閃、敵味方２２人の心技があやなす織布を切り裂いて白球がゴールネットを突き刺す。攻防は絶えず変化し両ゴールに向かって波が打ち寄せる。これぞサッカーの醍醐味でしょうか。

シュートの際の放出感は官能的でさえあり、相手攻撃のシステマティックな封じ込めは知的感動を呼ぶ。サッカーの魅力を挙げればきりがなくなります。ペガサスでプレーするとき、小生の頭の中にこのイメージが浮かび上がります。現実はお訊ね下さるな。

さりながら、これまで数多くのゲームや諸氏の談義から学び悟ったことも少なくありません。

例えば、ＤＦは自ゴールを向いて十分な仕事は出来ないこと、ゴール前では複数のＤＦも横方向に移動するボールに対して縦深性をもち得ないこと。彼我同数であるから味方との協同が局所戦のカギとなること。個々人の攻撃または防御の行為はカウンターパートと相対関係にあること（守備的な相手であれば攻めにでやすい。逆に攻めに出られたときは守らねばならない）などがそれです。

せんじつめればサッカーはこの“原理”に従い、またはその逆・裏を行って得点を狙い阻もうとしているもののように思われます。

この“原理”に叶うよう意図し図に当たるようなことが一ゲーム一回でもあればまさに至福といえます。皆様はどのような夢をお持ちでしょうか。これからは年齢だけが増えて行きますけどエレガントでビューティフルなシステムを口と頭で志すことは可能です。夢多き草サッカーを末長く楽しみたいと考えております。

（３） リーグ優勝を目指して

４２年卒　田部井　徹

平成２年までプレーしていた藤沢四十雀を辞めて、今期（’９１）よりペガサスでボールを蹴り、サッカーを楽しんでおります。一度入会した倶楽部を辞めるのは、非常に抵抗感がありますが、幸い藤沢四十雀には湘南の先輩がいらして、その人たちの理解のもとにチームを替えさせて頂きました。

二年の間、外から見ていたペガサスは、メンバーがいつも揃っていて、攻守にバランスがとれたとても素晴らしいチームという印象を持っていました。新しくメンバーになったからには、絶対リーグ優勝したいと、心密かに思っていましたが、初戦からつまずき、終わってみると戦績は、三勝五敗二分けと不本意な結果でした。敗因を分析してみますと、やはり今年からチームを二つに分けたせいか、メンバー不足が大きく結果に影響しているようです。途中、七人、八人の試合もあり、相手チームに対しても、大変失礼な思いをさせてしまいました。やはりリーグに登録した以上、最低限人数だけは揃えて、試合をやりたいと思います。

私の場合浦和で育ったせいもあり、小学四年の頃からサッカーを始め、現在に至ってお

ります。結婚後も学生時代と同様に、日曜日になるとボールを蹴りに出かけていますので、今ではすっかり習慣となり、家族も呆れて何も言えないというのが実態です。

人それぞれ自分におけるサッカーの位置付けは異なると思いますが、四十才を過ぎてもサッカーの試合に集まるということの中には、一つの共通点があると思います。それは皆、心の底からサッカーが好きだと言うことです。好きなサッカー、どうせやるなら勝ちたいと思います。それには多少メンバーの補強も必要となりますが、それ以上にチーム全員の意志統一が大切だと思います。来年こそ是非、皆でリーグ優勝の喜びを味わいましょう。

５．戦　績

昭和53年以降の年別記録（勝敗，得失点）を以下にまとめます。　勝敗へのこだわりが最優先ではなかったことがこの結果からもうかがわれます。
（各年のリーグ戦，トーナメント戦各々の順位等の記録は資料不足のため掲載省略）

記載事項理解のための注；

備考欄；・昭和59, 60 年の神奈川県郡市四十雀大会はトーナメント戦であった。 …… 四十雀大会と記載
（ブロック上位チームが準々決勝に進出）
・昭和60年以降の神奈川県郡市四十雀大会はリーグ戦となった。 …… リーグ戦と記載
・昭和63年に開始した神奈川県議長杯四十雀大会はトーナメント …… トーナメントと記載
・平成 3年リーグ戦（4 月）以降　ペガサスはシニア（２部リーグ）とジュニア（１部リーグ）とに分立した。 …… Ｓ，Ｊと区分記載。4 月以降の無印は合同での試合を示す。

記録欄；・左側はペガサスの得点，右側は相手チームの得点（ペガサス－相手）

昭和53年　（ 2戦　1勝 1敗　得点4 失点4 ）

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
12・17	3－1	神奈川	
〃	1－3	藤　沢	

昭和54年　（10戦　5勝 4敗　得点19失点26）

1・14	0－1	現役１年	蹴球祭
〃	3－0	藤　沢	〃
4・21	1－9	ドウ・クール	
5・12	5－2	荏原研究所	
〃	0－6	鎌倉教員	
10・27	0－5	藤　沢	
〃	5－0	茅が崎	
12・ 9	3－2	荏原研究所	
〃	1－1	茅が崎	
12・29	1－0	荏原インフィルコ	

昭和55年　（17戦　8勝 7敗 2分　得点41失点43）

1・15	5－1	藤　沢	蹴球祭
2・11	1－4	ＹＣＡＣ	
2・24	5－3	藤　沢	
3・16	1－0	茅が崎	
〃	2－0	東京四十雀	
4・ 6	1－1	小田高ＯＢ	小田高50周年
〃	0－3	〃	〃
4・27	4－1	郵船ＯＢ	
5・18	1－2	藤　沢	偲ぶ会
10・26	2－6	鵠沼アミーゴ	
〃	6－2	大庭コスモス	
11・ 9	2－8	藤　沢	
11・24	0－0	荏原製作所	
〃	5－1	茅が崎	

右上に続く

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
11・24	1－3	藤　沢	
12・28	1－7	ドウ・クール	
〃	4－1	藤　沢	

昭和56年　（15戦　5勝 7敗 3分　得点25失点34）

1・25	2－0	茅が崎	
〃	0－1	藤　沢	
2・ 7	0－7	ＹＣＡＣ	
2・22	0－2	茅が崎	
〃	2－2	藤　沢	
3・15	1－4	〃	
4・12	2－4	〃	
8・ 2	2－3	〃	
10・18	1－1	神　鋼	
〃	4－3	藤　沢	
11・ 7	3－4	ＹＣＡＣ	
11・23	4－1	茅が崎	
〃	2－2	藤　沢	
12・27	1－0	〃	
〃	1－0	〃	

昭和57年　(11戦 5勝 2敗 2分　不明2 得27失23)

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
1・23	1－6	ＹＣＡＣ	
2・14	4－1	県協会役員	
2・21	6－2	茅が崎	
5・30	?	藤　沢	
〃	?	茅が崎	
11・6	3－6	ＹＣＡＣ	
11・23	2－0	荏原製作所	
〃	2－0	茅が崎	
11・28	5－5	藤　沢	
12・19	2－2	〃	
〃	2－1	荏原／茅が崎	

昭和58年　(7戦 1勝 4敗 1分　不明1 得10失17)

1・30	1－2	藤　沢	
2・5	2－5	ＹＣＡＣ	
3・19	3－2	古河電工	
11・5	1－4	藤　沢	
11・27	2－3	小田高ＯＢ	
12・18	1－1	藤　沢	
〃	?	広沢高ＯＢ	

昭和59年　(10戦　4勝 3敗 3分　得点22失点21)

6・15	1－0	藤　沢	
〃	2－1	小田原	
7・15	4－0	〃	
10・14	0－2	茅が崎	四十雀大会
10・28	8－0	大　和	〃
11・3	1－1	鎌　倉	〃
11・11	0－6	横浜Ａ	〃　準々決勝
11・23	2－7	小田原	
12・9	2－2	藤　沢	
12・23	2－2	〃	

昭和60年　(18戦　6勝10敗 2分　得点32失点30)

2・16	0－4	ＹＣＡＣ	
2・24	1－2	茅が崎	
〃	1－2	小田原	
3・17	0－1	小田高ＯＢ	
4・14	2－2	神奈川	
5・3	0－2	慶大ＯＢ	
5・26	1－2	栄光ＯＢ	
〃	0－1	藤　沢	
7・21	6－0	早　園	四十雀大会

右上に続く

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
7・28	5－2	神奈川	
8・4	2－3	横須賀	四十雀大会
9・8	5－0	大　和	〃
9・29	1－0	横　浜	〃
10・27	3－1	藤　沢	
11・10	1－1	綾　瀬	〃　ＰＫ４－２
11・17	3－2	茅が崎	〃　準決勝
11・24	0－3	神奈川	〃　決　勝
12・21	1－2	日・揮	

昭和61年　(26戦　10勝11敗 4分不明1 得47失51)

1・15	0－2	藤　沢	蹴球祭
2・15	0－6	ＹＣＡＣ	
3・9	3－1	日新運輸	
〃	1－2	茅が崎	
〃	1－0	藤　沢	
3・21	3－5	小田高ＯＢ	
4・6	3－1	筑波大付ＯＢ	
4・15	4－1	ＪＡＬ	
5・11	1－1	鎌　倉	リーグ戦
5・18	5－5	栄光ＯＢ	
6・1	0－4	横須賀	リーグ戦
6・15	4－0	藤　沢	〃
6・22	2－8	綾　瀬	〃
6・29	1－2	横　浜	〃
7・13	?	藤沢／日新／藤沢市役所	
7・27	3－4	藤　沢	
9・7	1－1	藤　沢	
〃	1－1	藤沢市役所	
9・21	0－1	茅が崎	
10・10	1－2	神奈川	リーグ戦
10・19	不戦勝	茅が崎	〃
10・25	5－2	ＩＢＭ	
12・7	1－2	六角橋クラブ	ＯＢ大会
〃	3－0	小田高ＯＢ	〃
〃	1－0	鎌倉学園ＯＢ	〃
12・21	3－0	藤沢／大庭コスモス	

昭和62年（ 20 戦　10勝 5敗 5分　得点47失点41）

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
1・15	3－0	藤　沢	蹴球祭
2・14	1－6	ＹＣＡＣ	
3・29	2－1	小田高ＯＢ	
4・25	4－3	ＪＡＬ	
4・26	1－1	藤　沢	
〃	1－1	鎌　倉	
5・17	3－0	横　浜	リーグ戦
5・24	6－4	栄光ＯＢ	
5・31	0－1	神奈川	リーグ戦
6・14	1－1	横須賀	〃
8・ 1	1－2	厚木はやぶさ	
〃	1－1	綾　瀬	
8・ 9	2－1	鎌　倉	リーグ戦
8・29	0－3	綾　瀬	〃
9・ 6	6－2	寒　川	〃
10・18	2－1	小田原	〃
11・ 3	2－5	ＪＡＬ	
11・ 8	3－3	小田高ＯＢ	
12・20	4－3	横須賀	
〃	4－2	藤　沢	

昭和63年　（23戦　12勝 8敗 3分　得点38失点32）

1・15	1－1	藤　沢	蹴球祭
1・31	不戦勝	横　浜	トーナメント
2・13	1－4	ＹＣＡＣ	
2・14	2－0	神奈川	トーナメント
2・28	3－0	鎌　倉	〃
3・13	4－2	横浜シニア	〃　決勝
4・ 3	1－0	小田高ＯＢ	
4・17	1－1	藤　沢	
〃	2－1	鎌　倉	
4・24	4－1	ＪＡＬ	
5・ 8	0－2	横須賀	
6・ 5	1－0	藤　沢	リーグ戦
6・19	3－1	綾　瀬	〃
7・ 3	5－1	小田原	〃
7・31	4－0	鎌　倉	〃
8・21	2－0	川　崎	〃
8・28	1－4	神奈川	〃
10・ 2	1－3	横　浜	〃
10・16	1－5	横須賀	〃
10・23	0－1	小田高ＯＢ	ＯＢ大会
〃	0－1	鎌倉学園ＯＢ	〃
〃	0－3	栄光ＯＢ	〃
12・ 4	1－1	藤　沢	

平成 1年　（25戦 9勝 9敗 5分　不明1 得42失34）

月・日	記　録	相手チーム名	備　　考
1・15	0－1	藤　沢	蹴球祭
〃	0－0	慶大ＯＢ	〃
2・ 5	？	横　浜	トーナメント
2・19	5－0	茅が崎	〃
3・12	2－0	神奈川	〃
3・19	1－0	綾　瀬	〃　決勝
4・ 2	3－3	小田高ＯＢ	
4・19	4－1	ＬＡＬ	
5・ 3	1－5	慶大ＯＢ	
6・ 4	1－2	横須賀	リーグ戦
7・ 9	1－1	綾　瀬	〃
7・23	4－1	相模原	〃
7・30	5－2	茅が崎	〃
9・17	1－0	藤　沢	〃
10・15	0－2	神奈川	〃
10・22	1－2	鎌倉学園ＯＢ	ＯＢ大会
〃	0－0	栄光ＯＢ	〃
11・12	2－3	横　浜	リーグ戦
11・19	1－1	神奈川	横浜マスターズ
〃	4－0	横　浜	〃
11・26	0－1	川　崎	リーグ戦
12・ 3	0－2	神奈川	横浜マスターズ
〃	4－2	横　浜	〃
12・10	2－3	ＪＡＬ	
12・17	？	藤　沢	

平成 2年　（19戦10勝 5敗　不明 4　得46失21）

1・15	？	藤　沢	蹴球祭
2・ 8	0－1	鎌　倉	トーナメント
4・ 1	3－0	筑波大附ＯＢ	定期戦前座
4・15	？	ＪＡＬ	
4・30	2－1	綾　瀬	リーグ戦
6・10	7－1	川　崎	
6・24	6－1	横須賀	リーグ戦
7・ 8	5－0	相模原	〃
7・15	4－2	川　崎	
7・29	3－2	藤　沢	リーグ戦
9・ 2	1－5	川　崎	〃
9・ 9	3－2	寒　川	〃
9・23	？	藤　沢	
10・14	8－0	鎌　倉	リーグ戦
11・18	0－4	横　浜	〃
11・23	0－4	神奈川50Ｂ	横浜マスターズ
〃	4－0	神奈川50Ａ	〃
12・ 2	0－3	神奈川	リーグ戦
12・ 9	？	ＪＡＬ	

平成 3年　（ジュニア　1部リーグ戦
3勝 5敗 2分　得14失18
シニア　2部リーグ戦
2勝 7敗 1分　得 5失27
その他 5勝 7敗 2分不明1 得28失30）

月・日	記　録	相手チーム名	備　考
1・15	0－0	慶応大ＯＢ	蹴球祭
〃	?	藤　沢	〃
1・27	4－2	ＩＢＭ	
2・3	2－2	南足柄	トーナメント PK2-4
3・10	2－6	川　崎	
3・31	4－2	小田高ＯＢ	
5・9	0－3	神奈川	Ｊ・１部リーグ
6・2	3－2	寒　川	〃
6・16	7－1	相模原	〃
7・14	1－4	川　崎	〃
7・28	0－2	横須賀	〃
8・25	1－0	栄光学園	〃
9・29	0－2	藤　沢	〃
10・6	1－3	横　浜	〃
11・10	1－1	綾　瀬	〃
11・17	0－0	茅が崎	〃
4・28	0－5	平　塚	Ｓ・２部リーグ
5・12	0－2	早　園	〃
6・30	0－4	鎌　倉	〃
7・7	2－1	川　崎	〃
7・21	0－2	南足柄	〃
9・15	1－4	小田原	〃
9・22	1－0	茅が崎	〃
10・6	1－8	横浜ＯＢ	〃
10・20	0－0	神奈川Ａ	〃
11・4	0－1	大　和	〃
9・1	4－2	実践女子大	Ｓ
〃	3－4	慶応大ＯＢ	Ｓ
11・23	5－0	鹿行（茨城）	＊　１回戦
〃	0－1	茅が崎	＊　２回戦
11・24	0－2	大宮植竹シニア	＊　ＦＭ
〃	0－3	古河市壮年	＊　ＦＭ
〃	1－0	神奈川50Ｂ	Ｓ＊＊
〃	1－3	神奈川50Ａ	Ｓ＊＊　決勝
12・8	2－3	小田高ＯＢ	

＊：古河市マスターズ
＊＊：横浜マスターズ

平成 4年　（ジュニア…資料不足の為省略
シニア　…２部リーグ戦　1勝7敗3分 得 7失29
トーナメント　1回戦敗退 得 2失 3
その他　7勝5敗2分 得23失23）

月・日	記　録	相手チーム名	備　考
1・15	0－0	慶応大ＯＢ	蹴球祭
〃	0－1	ジュニア	〃
2・16	2－3	大　和	トーナメント
3・1	2－1	慶応大ＯＢ	
3・15	1－3	ボールクラブ	
4・19	2－3	県　庁	
5・4	4－2	ＪＡＬ	
5・17	1－1	神奈川	Ｓ・２部リーグ
6・7	2－2	茅が崎	〃
6・28	0－3	大　和	〃
7・5	0－8	横　浜	〃
7・11	0－6	清水四十雀	古河マスターズ
〃	4－1	ＮＴＴ関東	〃
7・12	2－1	十和田四十雀	〃
〃	1－1	柏キングス	〃
8・16	1－0	茅が崎	五十雀
〃	2－1	神奈川	〃
9・6	2－2	平　塚	Ｓ・２部リーグ
9・27	0－1	川　崎	〃
10・4	1－3	慶応大ＯＢ	
10・10	2－1	座間　旭	Ｓ・２部リーグ
11・1	0－5	厚木ＧＰ	〃
11・15	0－3	相模原	〃
12・6	0－2	鎌　倉	〃
12・13	0－1	草　園	〃
12・23	3－0	茅が崎	五十雀

編集後記

故岩淵先生の御賛同を得て湘南ペガサスが誕生して満１５年となりました。第２世代のチームが産声をあげた昨年、ペガサスの来し方を記録に残しておこうとの企画が持ち上がり、この冊子が作られました。何分幹事役の不慣れのため出来上がりが遅くなりました事をおわび申し上げます。

本誌はあくまでも第１集でありまして、今後の御出稿や本誌ご覧の上の追加原稿などがありましたら第２集をとりまとめるつもりです。奮って御応募下さい。

末筆ながら、師岩淵二郎氏のご命日は昭和５５年（’８０）３月４日であることを記しておきます。

（大内　記）